巻頭特集

宮座と祷屋（とうや）制、町衆の心意気が継承される

尾鷲神社のヤーヤ祭り

天下の奇祭「ヤーヤ祭り」は尾鷲神社の例大祭。「ヤーヤ」の名称は、武士が合戦時に名乗りをあげる「ヤーヤー我こそは」に由来するといわれる。祭りの起因は戦国時代にまで、さかのぼる。

3

4

2

1

1／真冬の夜でも熱気むんむん（ヤーヤの練り）
2／見学者も息をのむ一瞬（大弓の儀）
3／獅子頭を中心に、物々しい雰囲気（お獅子の出御）
4／薙刀を力強く振る男児（大名行列の練り）

上／神社や町中は提灯で幻想的　下／旧尾鷲町、20町のそれぞれのマーク

祭礼

受け継がれてきた祭りの主旨と活気

長い歴史もさることながら、五日間にわたるヤーヤ祭りは華やか且つにぎやかで、神事の厳粛さをも持ち合わせる。もともとは旧暦正月の八日間に行われていたが、明治以降の新暦採用以降、幾度か見直され、現在は二月一日から五日までが祭典の日となった。日は短くなったものの、およそ三百五十年前の江戸時代初期の神事・祭事は、ほぼ形を変えず、伝統が受け継がれている。旧尾鷲町の二十町から、毎年三つの町が祷務町（とうむ）となり、その代表者である祷人（とうにん）と汐撫（しおなで）、弓射（ゆみい）の三人が祭り奉仕の主役を務める。

人口が減るなか、祭りをどのように維持していくかは今後の課題でもあるが、「昔は祭りといえばどこの町でも休みでした。それを仕事を休まず、これほどの規模を保っているのは稀です。祭りが盛んな町には自ずと活気が生まれます。神社や氏子だけのものではなく、尾鷲全体で盛り上げて、祭りを守っていければ」と、尾鷲神社宮司の加藤守朗さんは祭りの大切さを話す。

神事、祭事を連日重ねるヤーヤ祭り

まずは、二月一日午前零時の御扉開き。これは祭りのにぎやかな様子を神様にご覧いただくためのお呼出しだ。このときばかりは、神聖で厳かな気持ちで臨みたいもの。お出迎えに粗相があってはならない。そして午前十時、祭りの歴史を報告する由緒祭が執り行われる。夜七時には、氏子全二十町の総代、町頭、若衆が神社に集結し、祭礼の始まりを告げる在回りを行う。それぞれ魚市場岸壁で垢離（こり）を掻（か）いて（水で身を清めること）神社に参拝し、二時間がかりで市内を歩く。太鼓や法螺貝が響き、提灯が揺れ進む情景は幻想的だ。

二日から四日にかけての三日間は、練りと禊（みそぎ）祓いのヤーヤ行事で、宵宮（よんみや）とも呼ばれる。各祷務町の通りの両側には、長さ五十から百メートルにもなるヒノキの丸太の矢来が組まれる。練りから家屋や見物人を守るためのもので、中央に祷屋がある。その前で町の若者衆が提灯の合図に従い、「ちょうさじゃ、ちょうさじゃ」と掛け声を上げながら激しくぶつかり、それを受けてまた押し返す。幾度となく繰り返される練りに圧倒される。「神社の主祭神は武速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）。その武神を称えるようにヤーヤの練りは勇壮豪快。祭り一番の見物です」と、加藤宮司。

もともと、この練りは各祷務町の祷人、汐撫、弓射らの役人が浜で身を清める垢離掻きや、神社に向かう途中、また参拝中にぶつかり、押し合ったのがはじまりとされる。現在は祷屋前での練りのあとに、垢離掻きに向かい、浜（魚市場）では役人らが素っ裸で海に飛び込み、東に向かって拍手を打ち拝礼し、身を清める。

最終日の五日には例大祭だ。午前九時半に神社で神事が行われると、午後には一番祷を先頭にして尾鷲神社への宮上がり。各町の手踊りや行列でひときわにぎやかな一日だ。獅子舞や神楽のあと、祷受町の尾鷲節踊り、祷務町の大名行列では子役の薙刀振りが勇ましく、各手伝町の手踊りが旧熊野街道を進み、二番祷、三番祷と続く。三つの祷全てが宮上がりし、踊りの奉納が終わる頃は、あたりもすでに薄暗く、境内には提灯が灯る。

夜は古式にのっとった大弓の儀。紀州・小笠原流の流れをくむその所作は機敏で、見ている方も背筋が伸びる。汐撫が射場を清め、約十四メートルの距離から、三祷の弓射が一立ち二矢ずつを七立ちし、合計一人十四矢ずつ射る。紋付き晴れ着の袴をはいた矢取役の子どもが愛らしい。矢が的の中心に当たった祷務町は、祓いと祝いを込めて、後に伊勢神宮へ御礼参りをする習慣も伝えられている。

弓が終わると御獅子の出御だ。この儀は、昔、大曽根浦に流れ着いたとされる獅子頭へ神様にお遷りいただく祝詞を奏上した後、神職が頭上に奉持し鳥居へと向かう。それを若衆が取り囲んで「お獅子じゃ、お獅子じゃ」の掛け声で押し進む。これは豊凶を占う神事で、獅子が戻るときに、右回り（西）で帰れば山方が豊作、左回り（東）なら浜方が豊漁だといわれ、若衆は獅子頭を自分たちの方へ向けようと凄まじい勢いで練り合う。そのあと、翌年の祷務町への祷渡しの儀が厳かに行われ、親方立ち会いの下、盃を交わし、五日間にわたる祭礼の幕が降りる。

加藤宮司とケヤキの大太鼓。直径130センチもある

守り伝えていきたい貴重な尾鷲の文化

戦国時代にさかのぼる祭りの由来は、当時の庄司・仲氏をはじめとする地侍衆が、尾鷲神社の祭神の武運にすがり、合戦に大勝利したことを、後世にまで語り継ごうとしたことが発端とされる。鎌倉時代の頃から行われた例大祭、大弓の儀などの神事に、氏子が練りや大名行列、手踊りを取り入れて、現在の基盤がつくられた。地侍衆が親方を務め、宮座制度として神事を行ってきたが、江戸時代に町衆から祭りに参加したいとの声が上がり、祷屋制がとられるように。その後も宮座制度は受け継がれ、現在も庄司・仲氏の家系が親方として重き役目を務める。加藤宮司はその貴重さを認識しながら、「長い三百五十年の歴史の中で、どの時代のヤーヤが地域にとって望ましいか。今後も変化を受け入れながら、尾鷲を伝えていって欲しい」と願う。ヤーヤ祭りは三重県の無形民族文化財に指定されている。

ヤーヤ見学攻略法

2月1日　尾鷲神社にて午前零時の御扉開き

神様のお出まし。静かに厳かな雰囲気を味わおう。

2月2～4日　各祷務町と浜にてヤーヤの練りと垢離掻き

尾鷲の男衆の熱い練りに、三重県知事も飛び込んだという。素っ裸の男衆が海へ！

2月5日　行列や手踊り

旧熊野街道を歩いてみよう。ちびっこの真剣な薙刀振りから目が離せない。

2月5日　大弓の儀と御獅子の出御

弓射の3人は1月中旬から毎日練習を重ねる。フラッシュはたかないで。弓の後、お獅子が登場！

尾鷲神社
尾鷲市北浦町12-5
TEL:0597-22-1486

文・写真／中村元美　写真提供／尾鷲神社　デザイン／chica